

山口県立大学 郷土文学資料センターだより

「文学不毛の地」という呪縛

和木浩子 (児童文学作家)

昭和40年代から平成にかけて、下関市在住の作家古川薫が直木賞候補になるたびに、地方局のニュースで繰り返される言葉があった。

「文学不毛の地と呼ばれる山口県ですが、さて……」

山口県に住む文学少女だった私はこれを聞いたとき心をつめた。自分は「文学不毛の地」に生まれたのだ、と。文学の道を志す子どもにとってこの言葉は呪いのように思われた。

「文学不毛の地」とは、誰がいつ言い出したのか？ 最近になって調べてみると、この言葉を気にする人や不快感を示している人の文章が見つかった。県内の文学者など、文学を大切に思う側から発言だ。古いところでは昭和37年に「由来山口県は文学不毛の地と周知されている。」との記述があった。

「不毛の地」という言い方ではないが、同じ内容の指摘は戦前にもされていた。昭和19年11月の『山口県文学』で中野真琴が述べている。「明治の皇政復古以来、時代の先駆であった防長の風土は、文学者の種子にとって荒蕪地であった。」「たとえ其処に数粒の文学者の種子が発芽しかけても、それ等は直ちに、政治家、軍人、事業家、教育者の畑に移植された。」「(防長現代文学のために－山口中学の文学者に就て－)」

大岡昇平が著書『中原中也』に書いていたのを思い出す。詩碑にもなった「あゝ おまへはなにをして来たのだと……／吹き来る風が私に云ふ」という「帰郷」の一節を、山口県人である中也の弟が「『おまえは東京へ出たくせに、ちっとも出世しないではないか』という意味にしか取れない、という。」と。東京人の大岡には目新しい視点だったようだ。同郷人の私にとっては分かりすぎて身にしみた。

冷静に考えて、山口県の文学はそんなに不毛だろうか。中野真琴は前掲の文中で、「山口中学で過去半世紀に於て育てた文学者」について、中途退学者を含めて「僅か五人きりである」と嘆いている。だが、その顔ぶれは、国木田独歩、青木健作、嘉村磯多、伊藤佐喜雄、種田山頭火となかなか豪華だ。しかも、三年まで在籍した中原中也が数えられていない。一校でこれだけ揃えば上等ではないか。県内のほかの地域を併せれば、まだまだ著名な文学者(河上徹太郎、宇野千代、金子みすゞ、まど・みちお……等々)がいる。

いわゆる「文学不毛の地」とは、山口県で政治家などが重んじられ、文学者が軽んじられたことへの地元の文学者の憤りが言わせた言葉だろうかと思う。

平成5年刊行の『児童文学のふるさと 47都道府県別児童文学案内』(文溪堂)では、山口県の項を担当した堀江晋が「一時、文学不毛が嘆かれたことがある。」と過去形で記した。古川薫が直木賞(平成2年下半期)を受賞した後は、ニュースの決まり文句を聞くこともなくなった。

私は「文学不毛の地」という呪縛から解放されたが、少女時代にそんな呪いがあったことは、記憶の隅に残った。



小学校の先輩、国木田独歩の詩碑(山口市亀山)



鈴木靖将 (日本画家)

大佛さんが去ってもう30年。私と大佛さんと出会ったのは46年前の事です。

私はインドの旅から帰って数ヶ月後に「当世人物15体展」なる個展を、京都の朝日新聞ギャラリーで開催した。インドの旅の直後であった為、作品の7割までがインドの人物画だった。片目の貧しきシタール弾き、笛売りの少年、乞食の老婆、ガンジス河畔で火葬される人々であった。他に「変人」と呼ばれる異端の名物尼さん、あだ名「平津の哲学者」と呼ばれる変なおじさん達で、アクの強い、かなり強烈で、しかもどこかユーモラスな個展会場だった。

この展覧会の事前記事として美術雑誌『芸術新潮』に紹介記事として出たのを、山口に住んで居た大佛さんが見てくれて、京都のギャラリーを訪ねてくれたのでした。この展覧会には、かなりの友人、知人達が、そして初めての方も多かった。

私は彼女に対して、遠路来ていただいたので、何か一言でも声を掛けなければと、失礼ですがあなたも何か描くか創るかをされているのですか、と尋ねた。すると彼女は、詩を書いています、と答えてくれた。私は少し興味を抱いて、それでは、もしよろしければぜひ読ませて下さい。何かありますか——私の住所を伝え、彼女の住所を書いてもらった。

そしてその事は展覧会の後始末の為、ほとんど忘れかけた頃に、彼女の礼状と共に5編の詩が送られて来た。余り印象に残っていなかった人の詩は、驚きでした。

不思議な呪文のように土俗的で草の匂い土の匂いがする。今迄出会った事のない情景なのだが、何度か読むと奥から少しづつ深い色彩が立ち上り、それがキラリ、キラリと迫って来るのだ。それは悪魔的な美しさが宿っているのだ。

おせんやあ〜い、おせんや〜い。オボオボガチ、オボオボガチ

ドンドンガンガン、フビンデフビンデヨウイワンワ、フビンデフビンデヨウイワンワ

薄暗い在所の地表からブブブブブッ何か泡と共につぶやきが頭にこびりつきました。

やがて私はもっともこの彼女の詩を読みたくなり、もっとも読みたいと手紙を送りました。すると少しづつ詩が送られて来ました。「薊」「羊歯」「藪柑子」「もう様と蛇」「長谷の四季」「髪結たきさん」「血筋」「片目の魚」「おせん淵」などでした。

それからの私は2年程、彼女の詩世界を夢中になって描き始めました。やがてまた、京都の清水坂にあった画廊で個展として発表したのです。そして彼女にぜひ見に来て欲しいと手紙を書きました。彼女はどんな反応をするだろうか、もうこれは闘いでした。

やがて個展が始まり、ついに彼女が画廊に見に来る日がきました。ギャラリーは1Fと2Fとあり、私は2Fで数人の友人達と話をしていました。ふと階下に何か異質な気配を感じ階下に降りると、彼女が絵の前で独り泣き崩れていました。私はやった！と思いました。ほんとうにホッとしました。この時、彼女と私は、しっかりと詩人と画家として出会えたと思いました。

何度か描き改めて、この時の個展の作品を中心にした絵で一気に1冊の詩画集『おせん淵』が誕生しました。その最初の詩画展を彼女の地元、山口市内の靴屋さんがやっていたギャラリーで開催しました。地元紙が何紙か取材してくれて話題になりました。彼女の詩の仲間達、職場の同僚達の友人、知人達が多勢来てくれて、彼女は、はにかみながらも静かに喜んでくれた。それからしばらくして、この出版が引きがねになったのだろう、彼女は山口県の芸術文化振興奨励賞を受賞され、さらに大きな話題になったことは嬉しいことでした。

この『おせん淵』推薦文を書いて下さったのが、九州詩壇の指導者であった著名な丸山豊先生だった。先生は大きな病院長をされていた医師であった。この丸山先生に大佛さんは指導を受けておられた。私も2、3度お目に掛かった。小柄な上品な穏やかな方だった。この出版の数年後、丸山先生は海外旅行中に、客死されたことを大佛さんから伺った。『月白の道』などの詩集で詩壇で権威あるH氏賞を受賞されていた。静かで深く思索的で美しい詩を書かれた方だった。

彼女の親友であった女性に、山口市桜島の「木もれ陽」と言う喫茶店のオーナーで絵も描かれた斉藤裕子さんと出会った。この斉藤さんは、大佛さんが文化賞を受賞された勢いもあったでしょう、喫茶店の横にギャラリー

を作られた。そしてやがて山口の文化の発表舞台として成長していきました。私も『おせん淵』の世界から、私の地元の足元を掘り起そうとして私の中に育ってきていた琵琶湖畔の古都、天智天皇の大津京の万葉世界を描き出していました。そんな絵をトラックで山口まで運び、このギャラリーで発表させて頂いた。

そんな頃、大佛さんにたいへんな不幸が襲ってきていた。脳腫瘍の為、片目の摘出手術を受けた。ショックでした。私は彼女自身も彼女が書き続けてきた薄幸の土くれの女たちの作品の1人として己れの生き様と重なることになってしまったと重苦しく、より不思議な詩世界を見ているようでした。

しかし彼女の病状は一進一退を繰り返し、何度か病院を見舞うが、斉藤さんがついに彼女の死を知らせてくれた。私は夜伽から寺に駆けつけた。彼女に予知能力があったのだろうか。こんな奇妙な事が起るなんて……。彼女の作品「長谷の四季」の中の「冬ぶし」、

「鯨ヲコウテツカアサイ」／カンカンへ鯨の塩漬を入れ／北浦の漁村から／谷間の村まで行商でまわる老婆
／手相も見るロクさんを／村人は待っていた／ロクさんは幼い少女だった私の手を取り／「フビンデ ヨウ
イワンワ」／ロクさんは黙って首を振る／ロクさんの目の色をじっと見ていた／「フビンデ ヨウイワンワ」

私はこの「長谷の四季」の一節を胸に嘔みしめていた。彼女は、もう痛みから苦しみからも解放され穏やかなふっくらとして深い眠りについていた。デスマスクをスケッチした。初めて出会った頃の細い草の精のような面影とはずいぶん変化していた。片目に眼帯をしていたが静かなやすらかな心持ち微笑を浮かべていた。

翌朝、5、6キロ離れた山口市に近い田畑に囲まれた火葬場にて彼女は荼毘に付された。

私は、彼女との不思議な出会いから今こうして別れることになったことを静かに回想していた。その時、村の親戚の人々を長谷の在所に車で送り届けていた彼女の弟さん、大佛忠夫さんが、あわてふためいて休憩所に駆け込んできて、私の手を取り、早く車に乗ってくれと血相を変えて、数キロ走ったろうか、車の外に私を連れ出した。そこには驚きの風景が展開されていたのだ。それは、火葬場から彼女を焼く煙が蛇のように龍のようにうねりながら彼女の在所の長谷に大空をゆっくりと走り、動いて長谷に向っているのである。

なんということだろう。私は夢中でいつも肩に掛けている布カバンに持ち歩いているスケッチブックに鉛筆で描き出した。1枚2枚と描くが入りきらない。スケッチブックのページをめくる。4枚5枚と描いても入りきらない。6枚でどうやら長谷のあたりまできて煙の龍は、渦を巻きゆっくりと薄くなって附近に漂った。これは何だ。こんな不思議な情景を現象を見たことがない。私は、大佛文乃の意志を感じていました。死しても彼女は詩を書いているのだとはっきりと思った。

彼女の詩碑が没後に建立された。草深い実家跡に見事な詩碑が詩の友人達や関係者達の御努力で残った。おせんやあ〜い、おせんやあ〜い。貧しい牛飼いの娘の声が霧の中から今も響く。

大佛さんの亡き後、数年後に喫茶店とギャラリーのオーナー斉藤裕子さんも亡くなられた。若くて美しく独身だった。彼女も生涯心臓病であった。また彼女も紡がれた大佛さんの詩のモデルの一人であったように思える。

2026年1月 合掌



大佛文乃詩・鈴木靖将画『詩画集 おせん淵』サンブライト出版、1984



鈴木靖将画「おせん淵」（『詩画集 おせん淵』より転載）



世界の詩人大佛文乃

角 田 禮 子

大佛文乃さんは山口市で生まれ、実家の山口市阿東地福で過されました。私は周南市福川で生まれ、地福の小中学校を卒業。彼女は私の家の近くの中学校に通われる時、何度かお見かけし、長い髪の毛のとてもよく似合う、お姉さんという感じの美しい方でした。

私は結婚後、昭和46年4月に読書会を立ち上げ、県立図書館で当番が10冊の本を貸りて読みまわし、月に1度読書会を開催していました。昭和63年3月、「おせん淵」を全員（38名）で購入。大佛文乃さんをお招きして、学習会を開催しました。彼女はその時眼帯をされていましたが、別に気にもしませんでした。後に、「全国優良読書グループ」の表彰を受け彼女に報告したところ、とても喜んで下さいました。

彼女は、山口県立大の近くの「木もれ陽」という喫茶店の経営者で画家の齊藤裕子さんと親友で、私は何度か訪ねました。

大佛文乃さんは、女性として初めて、山口県芸術文化振興奨励賞を授賞しておられます。

平成4年4月の「ききょうの花」の出版祝賀会には、東京や九州からも出席者があり、60名の中で私は、彼女のおふる里阿東町から、代表で出席、テレビ局、新聞社の来られている中6番目に挨拶に指名されました。

私は、ある夏の夕方、彼女に用事があり、山口市の曲田アパートを訪ねましたが留守でした。その後日赤病院に入院された事を知り、病院を訪ねました。

平成7年11月24日死去後、親友の齊藤裕子さんから、たつての詩碑建立の願いで私は阿東町を、彼女は山口市をと奔走。途中で裕子さんが亡くなられ、藤原多美子さん、山本寛嗣さん（文乃さんと同級生）で募り834名の浄財を集める事ができました。詩碑は文乃さんの実家跡地に、徳佐の金子信華園（私の友人）に依頼建立。裕子さんは、亡くなられる前に、詩碑に使用して欲しいと石を購入しておられたので、その石を一部使用してもらい、「おせん淵」をイメージした詩碑を建立することができました。碑文揮毫は、鈴木靖将氏にお願いしました。

除幕式の日、鈴木靖将画伯が連絡もなく、お見えにならないので、よほどの事があったのだろうと、気にかかっていましたが、数年前御夫婦で来られ、娘さんの突然の死を伺いました。鈴木先生はその時「おせん淵」の貴重な原画を寄贈され、大佛文乃さんの写真と共に阿東図書館に掲げてあります。

詩碑の浄財の残金は、福田百合子先生、和田健氏を顧問として、有志5人で大佛文乃全詩集刊行会を立ちあげて発行致しました。

世界の詩人、大佛文乃没後30年、詩碑建立29年。

この阿東の地にあつて、世界の詩人大佛文乃さんとの不思議なご縁のあつた幸せを、今しみじみとかみしめています。



今では無名？の詩人大佛文乃

山 本 寛 嗣 (コスモス短歌会山口県支部長)

「大佛文乃全詩集」刊行のことなど

詩碑建立が進む間にも多くの声があり、それに応えるための手立てとして再刊や復刻が望ましいのはわかるがむづかしい。そのこともあり齊藤裕子ほかの思わぬ早世で諸資料散逸が危惧されるため各種資料まで網羅した全詩集編纂を和田健・清原万里から示唆され、清原を含む秋吉康・藤原多美子・角田禮子・私で全詩集編纂を協議した。詩作には全く無縁の私は文乃の地元、幼なじみで短歌を作っていて文学に無関係ではないと編集委員に引っぱり込まれた。

編集方針を決めた矢先に清原の急逝にあい、県立大学勤務の清原保存の貴重な資料が同氏所有のパソコンに保存されているはずだが開けない（パスワードがみあたらなかったとのこと）と判明し、資料収載は断念し、せめて作品だけでもまとめておこうと思い直した。

つまり文乃没後間もないことから往復書簡では個人情報も多く含むため生存者のプライバシー等を考慮して割愛し、未刊の詩やエッセイなどの作品を可能な限り収集する方針で作業を進めた。

幸いに既刊詩集のほか高校時代の部誌「無蓋車」「遠山」「樵野」は山口高校の先輩から、阿東町広報紙「あとう」に寄せたエッセイは町当局から提供があり、日赤入院時の七夕飾りに寄せた詩は当時の従業員であった方が書き写していたものを寄せてくださった。それらは全詩集巻末に載せている。

書籍出版は資金なしには無理。有料頒布分だけでは単価が高くなり売れ行きに危惧があるが、前記詩碑建立時の残金があり文乃を顕彰するために役立てようと提供の申し出を受け、ずいぶん定価を下げて平成17年4月1日付けで刊行した。

ごく私的なまとめ

思い出すままに書き連ねたことを総まとめとして、文乃詩碑除幕式で配布した栞「大佛文乃詩碑 除幕によせて」に添えている「あとがきにかえて」を転載する。

彼女の性格から人生の大半を過ごした地福ではたいへん慎ましく静かな生活を送り、ほとんど目立つこともなく、詩の世界があることなどどれほどの人が知っていたでしょうか。

地福駅から的場の自宅までの3キロあまりの道を高校通学から山口県庁職業安定課に通うあいだ朝夕徒歩で往復していました。近代の女性にはめずらしく自転車にも自動車にも乗ろうとしませんでした。往復の列車で過ごす2時間は読書にあてられ、ここでも目立たないOLの印象でした。

その彼女のどこにあれほどの創作意欲が秘められていたのか、いまもって不思議であります。長谷川に沿う山間の部落と山道から感じられる自然・伝説・農村習俗に響きあう感性と、家族や隣人との関わり、詩人・俳人・歌人から日本画家・洋画家、さらには舞台人や哲学者・陶芸家との交わり、これらすべての営為が残された六冊の詩集に凝縮されたのであろうと思います。

彼女の詩の多くは長谷(ながたに)という山間の部落を題材にしています。もちろん詩にうたわれた長谷は現実とは違い、彼女の詩的感性によって脚色されています。そんななかにあって具体的な題材の一つがおせん淵であり、一篇の詩「おせん淵」として完成しています。そのおせん淵は彼女が幼いときから住んだ家の近くを流れる長谷川にかかる橋の下にあり、その淵にまつわる伝承によっています。詩碑とおせん淵は20メートルほどの距離にありますが、併せて永遠に伝えられることでしょう。

彼女の詩は人生というにはやや短い生涯を一所懸命に生きた女人の生の証であります。

*コスモス短歌会山口県支部発行『小宇宙』第11号（2023〈令和5〉年7月）より抜粋転載

寄贈図書（2025年5月19日～2026年1月15日現在）

こだままこと『Private Oasis』

さようなら旧市庁舎プロジェクト実行委員会『さようなら旧市庁舎プロジェクト—ハシヲワタス—』

寄贈雑誌（2025年5月19日～2026年1月15日現在）

『山口県立美術館ニュース 天花』第143～144号（山口県立美術館）、『文芸山口』第381～384号（山口県文芸懇話会）、『佐波の里』第53号（防府史談会）、『大内文化探訪』第43号（大内文化探訪会）、『其桃』第941～944号（『其桃』発行所）、『山彦』第188～191号（山彦発行所）、『ふるさと通信 きずな』第21号（ふるさと紀行編集部）、『研究所年報』第17号（大妻女子大学草稿・テキスト研究所）、『小宇宙』第13号（コスモス短歌会山口県支部）、『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』第19号（神戸女子大学古典芸能研究センター）、『やまなみ』第42号（やまなみの会）、『中原中也研究』第30号（中原中也の会）、『新紫南』第5号（田村悌夫）、『大地通信』第56号（明日を紡ぐ大地の会）、『すばる』第60号（すばる俳句会）

愛の詩碑

伊藤 繁 樹 (氏原大作平成顕彰会)

まず一番大切なことから書き始めます。

県内の文学通や阿東の人ならほとんどの人が知っている、氏原大作の「大樹蔭多し 光明のみを願わんや ひとりを受せ清からば ひそかに愛せふかからば」の詩は島木赤彦(詩人)の作った詩で、氏原大作の作った詩ではありません。今回県立図書館の協力を得て、『島木赤彦全集』第2巻に「大樹」という題名でこの詩があるのを確認いたしました。

ではなぜ、氏原大作の詩と勘違いして詩碑をつくってしまったのか？

氏原大作が亡くなって今年が没後70年、詩碑が造られてから58年、詩碑をつくるために当時の氏原大作顕彰会が捜していたのが、氏原大作自作で自筆の詩、そしてたまたまあったのが友人の娘の結婚式に贈った氏原大作自筆の「大樹」の色紙。

これでいいのかと調べたようですが、「氏原が作品の中で島木赤彦の詩と書いているぞ? でも。」「三つの氏原作品の中に書いている! だから。」「島木の郷里にも問い合わせた(島木没後43年のことで関係者は違うと答えている)やっばり。」「……」けど結果は島木赤彦の詩でした。

氏原大作は戦中戦後の児童文学作家として活躍し、その作品は2本映画化されるなど一世を風靡した時もありました。彼の作品には悪人がいない、阿東の地を舞台にそこに住んでいる人たちが登場して物語が作られていくという、地元の人達にとってはなんともワクワクする文学作品だったのです。

氏原大作は人柄もやさしく思いやりがあり世話好きな作家でした、生涯阿東で暮らし、ヒューマンで素朴な作品を愛した人は多かったのです。

当然、氏原大作を忘れまいとする動きが出てきて彼の詩碑を建てようという話になり顕彰会を立ち上げ、1年で詩碑を造り上げます。

氏原大作の友人知人慕う人達の愛によって建てられました。

再度なぜ氏原大作の自作の詩だと勘違いしてしまったのでしょうか？

県立図書館によると、当時いい詩があるとその詩を愛誦詩として口ずさんだり引用したりするのはよくあることでした。

氏原大作も作品の中で島木先生の「大樹…」と引用して書いています。

それなのにどうして? ここでもう一度詩を読んでみましょう。

大樹蔭多し 光明のみを願わんや ひとりを受せ清からば ひそかに愛せふかからば

この詩をどう読み解くのか!? ここからは少し想像が入ります。

原 阜(氏原大作) 青年教師(24才)と生徒だった登代子さん(15才)の恋は世間から認められず、2人はひそかに思いを伝える文を歌誌『アララギ』に挟んで、通学路にある おどろ(小木の東)の中に隠して、手紙のやり取りをするという純真なものでした(氏原大作伝より)。その歌誌『アララギ』の中に島木赤彦の詩「大樹蔭多し…」が載っていたのです(県立図書館調べ)。

登代子さんと阜青年教師は「…一人を受せ清からば ひそかに愛せふかからば」という詩に自分たちの境遇を重ね合わせてしまったのでしょう。ここから2人の愛誦詩となっていくのです。何度も何度も何度も、結婚してからも、当時の熱い思いは愛誦詩として2人の間を行き来していくのです。

2人の固い愛の詩となった「大樹」は、周りの人や後世の人をも勘違いさせる程に2人の「詩」になってしまっていたのでしょうか。

現在も長門峡入り口に鎮座する、詩碑文は氏原大作自作の詩ではありませんが、2人が死の間際までお互いを愛した純真な「恋のあかし」として、詩碑になったこの詩は、見る人読む人に強い「愛の信念」を与えてくれるでしょう。

この碑の前に立つことがあれば、登代子さんと原阜青年に詩を詠んであげてください。



氏原大作筆の島木赤彦の詩碑

編集後記

今号では、「文学不毛の地山口」「大佛文乃没後30年」「氏原大作詩碑」について、5名の方よりご寄稿いただきました。ありがとうございました。(菱岡憲司)



■編集発行：山口県立大学郷土文学資料センター(〒753-8502 山口市桜島 6-2-1)

TEL. (083) 928-0211 FAX. (083) 928-2251

■発行日：2026(令和8)年3月15日